

平成17年3月 現代密教 第18号 抜刷

弘法大師筆写『八曼荼羅経』梵文テキストについて

矢 板 秀 臣

弘法大師筆写『八曼荼羅經』梵文テキストについて

矢板秀臣

西暦804年に唐に渡った祖師弘法大師空海は、今からちょうど1200年前には唐の長安にあって勉強に励んでおられた。言うまでもなくそれは、その後に形成された祖師の思想にとって、そして現在の真言教学にとっても、測りしれない重要性を持っている。長安での祖師の勉強の広さ、質そして量は、筆者の想像をはるかに越えるものであろうが、真言学徒ならずとも多くの人がその中身に深い関心をもち、そして研究を行ってきた。インドの梵語文献を研究してきている者にとっては、祖師が長安から請来された梵語資料や、当地での梵語研究についての興味は尽きない。¹

本誌掲載の吉田宏哲博士の論文にあるように、智山伝法院では「弘法大師の総合性を問う」という標題の基に総合研究を行うことになった。その一環として筆者は祖師の梵文・梵字関係の資料を徹底的に精査したいと考えている。長安にて、梵語についての研究が必要だと考えて祖師自身が懸命に習得されたことは確かである。梵語の発音、梵字の書写法、そして重要な単語あるいは真言や陀羅尼などにある単語の意味などは最低限必要と考えられたであろうし、密教を自ら体得しそして日本へ将来するに際して相当の梵語研究を必要と考えられたであろう²。今後の研究にとって興味ある視点として、祖師の筆写本や著作を調査してその梵語学習の様相を理解することによって、祖師が当時自己の教学にとってそれがいかに必要であったのか、どのような梵語素養を必要と考えていたのか等々を、逆に関心することができるのではないかという点がある。このことは祖師のインド観——仏教・密教に限らず宗教・哲学・風土等を含めて——の理解にも通じるものと思われる。

空海自筆と言われる梵本『八曼荼羅經』は、そういう意味においても非常に重要で興味深い研究資料である³。しかも宮坂宥勝博士による詳細で緻密な研究がある⁴。宮坂博士の論文に依拠しつつ『八曼荼羅經』梵文テキストを詳細に調査した結果、後述するような、テキストについていくつかの点が新たに判明した。それによって、より正確な校訂テキストを作成できると思われるので、ここに新たに校訂テキストを提示し和訳を試みるのもまったく無意味ではなからうと考える⁵。祖師の筆写された一梵語テキストの全容がより明白になり、そしてそれによって本經の解釈もまた明確になることは、意義深いことと思われる。

1 『請来目録』によれば、祖師は「梵字真言讚等都て四十二部四十四卷」(p.534)を、さらに「梵夾三口」(p.561)をも請来した。また恵果阿闍梨から灌頂を受けた際には「胎藏の梵字・儀軌を受け」云々(p.557)、「梵字・梵讚間もってこれを学す」(p.558)などとある。

2 梵語テキストをすらすらと翻訳する程の梵語素養を必須とされたかどうかとも興味ある点である。

3 『三十帖策子』所収。『三十帖策子』の文字等について井ノ口1974、中田1974参照。『三十帖策子』の写真版は、『真筆集成』2の他に、仁和寺篇『国宝三十帖策子 重要文化財十地経策子 <原寸複製>』(昭和52年)、弘法大師墨蹟聚集行会編『弘法大師墨蹟聚集一書の曼荼羅世界』(平成12年)がある。

4 宮坂1977/78、宮坂1981。

5 校訂テキストと試訳は、本稿において後に提示される。

弘法大師筆写『八曼荼羅經』梵文テキストについて

宮坂博士が指摘されるように『八曼荼羅經』は、祖師の筆写したもののなかでは例外的に横書きで書かれ、インドの梵語写本との親近関係をもつ貴重な意義深い研究資料である。同経について、梵文資料は他にないが、漢訳二本(不空、法賢訳)とチベット訳があり、それらのテキストはすべて博士の論文に示されている。⁶

『八曼荼羅經』が八曼荼羅觀すなわち八大菩薩の曼荼羅の觀想法を説くものであることは、この基礎研究によっても理解できる⁷。中央におられる釈迦如来の周りを八大菩薩が囲む、という構図の曼荼羅を前にして⁸、八大菩薩のそれぞれの真言を唱える觀想法である。それによって、この觀法を行じた者の願いは成就し、悟りが得られ、そして衆生を利益することができるのである。このような内容の經典、つまり如来・菩薩の曼荼羅を前にしてそれぞれの真言を唱える觀法によって、自利利他の果報が得られるとするこの『八曼荼羅經』を、祖師が特別な目をもって筆写し漢語訳を付したであろうことは⁹、祖師の教学を研究する上で注目に値するところである。

『八曼荼羅經』の梵文タイトルは弘法大師筆写本には残念ながらないが¹⁰、本テキスト中の言葉やチベット訳などから *Aṣṭamaṅḍalakaśāstra* と想定される。 *Aṣṭamaṅḍalaka* (八曼荼羅) とは、前述のように、八大菩薩の曼荼羅の觀想法を意味しよう。単に八大菩薩の曼荼羅を説く経であればタイトルは *Aṣṭamaṅḍalakaśāstra* であるはずであろう。すなわち、*aṣṭamaṅḍalaka* 中の *ka* は形容句を構成し、「八 [大菩薩] 曼荼羅の」、「八曼荼羅についての」あるいは「八曼荼羅から成る」何かを意味し、その何かを形容していると思われる。それが何かは、梵本そして漢訳・チベット訳に明示されていないが、全体の内容から判断するところでは觀法・眞想法であると考えられよう¹¹。不空訳では、本経の後半、八大菩薩

6 宮坂1981 p.(146)-(156)。梵藏漢(二本)は、一字一句一致するわけではなく、読みがそれぞれ少なからず異なっている。宮坂博士はチベット訳を提示するに際して、デルゲ版(2本)、ペキン版(2本)、ナルタン版、チョーネ版、ラサ版(2本)のすべてを対照されている。

7 これは不空訳(Ch¹)において、より明確に示されている。八大菩薩については松長1991、頼富1990、同1990b、同1992を参照。

8 この構図は不空訳にのみある。ただし、中央に釈迦如来がおられることは梵本にある(本稿の校訂テキストの21行目参照)。法賢訳にも「安曼拏羅中心」とあり、チベット訳にも *dbus kyi bcom ldan 'das* (中央の世尊) とある。

9 前述したように『八曼荼羅經』が、インドの梵語写本のように横書きで書かれていることに、少なからず重要な意味があると思われる。

10 「八曼荼羅經」という漢字のタイトルのみが書かれている。

11 具体的には *vidhi* (儀軌、男性名詞)、*sādhana* (成就法、中性名詞) などの語が見られる。種智院大学の野口圭也教授から、マンドラを用いた儀礼 (**aṣṭamaṅḍalaka-vidhi*) という意見をいただいた。同教授からは原稿段階で、他にも貴重なご助言を頂戴した。記して謝意を表したい。

またテキスト中に *aṣṭamaṅḍalakaṃ kartukāmo* とあるがこれは「八曼荼羅觀を行じようとしている者」と解釈される。*ka* がなく *aṣṭamaṅḍalakaṃ kartukāmo* であれば「八曼荼羅を作成したい」と解すべきであろう。不空訳(Ch¹)には「作八曼荼羅者云何建立」、法賢訳(Ch²)では「欲作八曼荼羅云何受持恭敬供養」とある(チベット訳: *dkyil 'khor brgyad pa bgril par 'tshal na*)。

また、本経の後半部に写本では *maṅḍalakaśāstra purataś* とあり、これでは「八曼荼羅觀の前で唱える」となり不具合であるので、*ka* を削除して「八曼荼羅の前で唱える」と解釈した。チベット訳: *dkyil 'khor gyi mdun du*。 Cf. 法賢訳(Ch²)「於此曼拏羅依法受持」。

の真言・位置・姿形を述べたすぐ後に「此八大菩薩曼荼羅供養觀行法」とある¹²。また法賢訳では末尾に「於此曼拏羅依法受持、志心持誦根本大明、彼人速得成就阿耨多羅三藐三菩提」とある。

祖師の筆写になる『八曼荼羅經』梵文テキストについていくつかの点が新たに判明したと先に述べた。それは、特にその前半部においてMahāvīyutpatti (『翻譯名義大集』、略号MV) にパラレルな語句が多数見出されること、そして写本中に間違った所に混入している単語があり、その正しい位置を想定できることである。

まずMahāvīyutpatti (MV) に見出されたパラレルは以下のものである¹³。

- MV 6273: parivṛtaḥ (Cf. Ms parivṛto.)
 MV 6274: puraskṛtaḥ (Cf. Ms puraskṛtaḥ.)
 MV 6279: tasmin paṛṣatsaṃnipāte saṃniṣaṇṇaḥ.
 (Cf. Ms tatraiva paṛṣadi satvipatito bhūt satīṣaṇṇaḥ)
 MV 6648: utthāya. (Cf. Ms utthāyāsanāt.)
 MV 6276: ekāṃsam uttarāsaṃgaṃ kṛtvā.
 (Cf. Ms ekāṃsam uttarāsaṃgaṃ kṛtvā)
 MV 6277: dakṣiṇaṃ jānumaṇḍalaṃ pṛthivyāṃ pratiṣṭhāpya.
 (Cf. Ms dakṣiṇajānumaṇḍalaṃ pṛthivyā pratiṣṭhā)
 MV 6278: yena bhagavāms tenāñjaliṃ praṇāmya.
 (Cf. Ms yena bhagavāms tenājali praṇāmya)
 MV 6311: kaṃ cid eva pradeśam. (Cf. Ms kiṃ cid eva pradeśem)
 MV 6310: sacet pṛṣṭaḥ praśnavyākaraṇāya¹⁴ avakāśaṃ kuryāt.
 (Cf. Ms satsa bhagavān avakāśaṃ kuryāt pṛṣṭaḥ praśnavyākaraṇāya)
 MV 6318: cittam arādhayiṣye. (Cf. Ms cittam arādhayiṣye)
 MV 6314: sādhu sādhu. (Cf. Ms sādhu sādhu)
 MV 6315: tena hi śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca manasikuru.
 (Cf. Ms tena hi śṛṇu kulaputra)
 MV 7510 sarvārthasādhakaḥ¹⁵
 MV 6355: anuttarāyāṃ samyaksambodhāv abhisambuddhaḥ.¹⁶

いずれも慣用句であって、『八曼荼羅經』の思想内容の理解に直接寄与するわけではない。しかしともかくこれらによって、『八曼荼羅經』梵文テキスト中の不明であった単語あるいは文を、正しく判定し校訂することができ、それによって本經の全体像を把握でき、

¹² 前半には「有八曼荼羅、是八大菩薩甚深法要」とある。

¹³ いずれも慣用句であって、他の經典においても多数見られる語句である。従ってこれらのパラレル語句はMVに限って見られるわけではないが、それらをリストアップするにはMVが便利である。MVはサンスクリット語とチベット語の対応語集として作成されたものである。なおMV section 245 (6262-7696) は慣用句の集成である。

¹⁴ praśnavyākaraṇāyaをMV1によりpraśnavyākaraṇāyaと訂する。

¹⁵ Cf. MV 743 sarvārthasiddhaḥ. (MVの菩薩禪定名号のsection)

¹⁶ Cf. MV 6905: abhisambotsyate.

弘法大師筆写『八曼荼羅經』梵文テキストについて

ひいては他の部分の明確なテキスト理解にもつながった。

梵本は完結しておらず、本經の結論部の途中で終わってしまっているの、その部分は主にチベット訳に基づき、そして漢訳、さらにMVや本經前半部の語彙を参照して還梵を行った。還梵は不完全であり決して満足できるものではなく、便宜的に行うものである。

写本中の間違った所に混入されている単語とは、Ms (38)(39)つまり写本38行目から39行目にかけてのetāny aṣṭāboのことである。これはそこにおいては何の意味をもなさないが、44行目のhrdayaとdhisatvaの間に本来あるべき語であって、これをそこへ移動することによってetāny aṣṭābodhisattvahrdayāniという文章になり、「これらが八(大)菩薩の心咒である」という明快な解釈が得られる。¹⁷

本稿において『八曼荼羅經』校訂テキストと和訳を提示する前に、『八曼荼羅經』の梵字に付されている祖師自筆の漢語逐語訳について触れたい。この漢語逐語訳については宮坂博士がすでに「空海自筆の逐語訳一覧」としてまとめておられる。そこでは逐語訳と梵語との対応関係が正しく示されているが¹⁸、祖師の筆写本では実際には逐語訳がその対応する梵語とは異なった所に付されている場合が少なからずある。たとえば、Ms(3)つまり写本3行目、kitasvaの下に「宮殿」と書かれているが、宮殿はkitasvaより右に2文字先のbhavaneに相当する語である。このような、対応する漢語の位置がずれている例は相当の数のほる。

同写本の冒頭にnamaḥとある。これは「帰依します」を意味し、普通はその直後に「仏に対して」とか「一切智者に対して」を意味するbuddhāya、sarvajñāyaなどの語が続くものであるが、同写本はそれを欠いていて不自然である。そうなった理由を探てみると当時の事情、様子がさまざま想像される。「namaḥ云々」は、書写する者が自己の信仰対象に応じて書き込む習慣であったことが確認される。祖師が写した写本にはすでに「仏に対して」などと書き込まれていたはずであるが¹⁹、おそらく師匠²⁰にその旨を指示されたので、写した写本に書いてあったであろう言葉（「仏に対して」など）をそのまま写しはしなかった。しかし何らかの理由で、自己の信仰対象を書き込む機会を逸してしまったのではないか、などと想像される。祖師がここに何と書きこもうとしていたのか、興味ある所である。

¹⁷ 校訂テキストの30行目を参照。全体を対格(Accusative)と解して、直後のuccārayatiの目的語として「これらの八(大)菩薩の心咒を唱える」と理解してもよいであろう。Tib: byañ chub sems dpa' brgyad kyi snīn po. Ch¹: 此八大菩薩曼陀羅供養觀行法; Ch²: 如是八大菩薩根本心大明、作如來曼拏羅。

¹⁸ 宮坂1981 p.(147)-(148).

¹⁹ そこにはsarvajñāyaなど、無声音で始まる言葉があったはずである。buddhāyaなどの語が続くとすればnamaḥではなくnamoとなっていなければならない。ただし本写本には、そのような連声(sandhi)の規則が正確に守られているわけではないので、その限りではない。

²⁰ 般若三藏などが考えられる。

<校訂テキストと和訳について>

左ページの上段に梵文校訂テキスト、下段に和訳を、そして右ページにテキスト註を、見開きで示す。

梵文校訂テキストには、便宜上の行番号を左端に付した。右ページのテキスト註の左の数字は、その校訂テキストの行番号であり、その行の語句に対する注解であると理解されたい。

真言に番号を付したが、これも便宜的なもので、写本にあるわけではない。

<参考文献と略号>

- Ch¹ 不空訳『八大菩薩曼陀羅經』（大正 No.1167）. See宮坂1981 p.(153)-(156).
 Ch² 法賢訳『仏説大乘八大曼拏羅經』（大正 No.1168）. See宮坂1981 p.(153)-(156).
 Ms 弘法大師筆写『八曼荼羅經』写本。『真蹟集成』2、写真No.139-144.²¹
 MV Mahāvvyutpatti. 榊亮三郎『翻訳名義大集』1973 <1916>.
 MV₁ Y.Ishihama & Y.Fukuda (ed.), *A New Critical Edition of the Mahāvvyutpatti. Sanskrit-Tibetan-Mongolian Dictionary of Buddhist Terminology*, Tokyo, 1989.
 Tib チベット訳『八曼荼羅經』。See宮坂1981 p.(150)-(153).
- 井ノ口1974 井ノ口泰淳「三十帖策子中の梵字」（『真蹟集成』1、p.105-108）
 中田1974 中田勇次郎「三十帖策子中の大師の真蹟」（『真蹟集成』1、p.98-100）
 『請来目録』 真保龍敏訳注「請来目録」（『弘法大師 空海全集』第二巻 pp.529-563.）
 『真蹟集成』1 佐和隆研・中田勇次郎編『弘法大師真蹟集成 解説』1974.
 『真蹟集成』2 同編『弘法大師真蹟集成』1974.
 松長1991 松長恵史「チャンディ・ムンドウーの八大菩薩」（『密教文化』174、pp.44-78.）
 宮坂1977/78 宮坂宥勝「三十帖策子の梵文について」（宮坂『古典論』上 pp.(88)-(135). 初出：『元興寺文化財研究所年報』）
 宮坂1981 宮坂宥勝「弘法大師空海請来『梵本八曼荼羅經』の研究」（宮坂『古典論』上 pp.(136)-(156). 初出：『成田山仏教研究所紀要』6、1981）
 頼富1990a 頼富本宏「インドの八大菩薩像」（『密教仏の研究』pp.607-622.）
 頼富1990b 頼富本宏「『金剛手灌頂タントラ』の四仏・八大菩薩説」（『仏教と社会 仲尾俊博先生古稀記念論集』pp.161-180.）
 頼富1992 頼富本宏「マンガラと八大菩薩」（『日本仏教学会年報』57、pp.251-267.）

²¹ 本稿におけるMs(7)などの表記は、写本(Ms)での行数(7行目)を意味している。この行数については宮坂1981 p.(146)-(147)に使われているのを借用している。この行番号は写本全体における通し番号となっている。

(Aṣṭamaṇḍalakasūtram)

namaḥ (sarvabuddhabodhisattvebhyaḥ/)

evam mayā śrutam. ekasmin samaye bhagavān potalake viharati sma.
āryāvalokiteśvarasya bhavane 'nekabodhisattvakoṇinayutaśatasahasraiḥ parivṛtaḥ
puraskṛtaḥ.

- 5 atha khalu ratnagarbhacandrāvabhāso nāma bodhisattvamahāsattvas tatraiva
parśadi samnipatite 'bhūt samniṣaṇṇaḥ. sa tatrotthāyāsanād ekāmsam
uttarāsaṅgaṃ kṛtvā dakṣiṇajānumaṇḍalaṃ pṛthivyāṃ pratiṣṭhāpya yena bhagavāms
tenāñjaliṃ praṇamya bhagavantam etad avocad vacaḥ: "pṛcchāmy ahaṃ
bhagavaṃs tathāgatam arhantaṃ samyaksambuddhaṃ kiṃ cid eva pradeśam.
10 bhagavann avakāśaṃ kuryāt pṛṣṭaḥ praśnavyākaraṇāya."

evam ukte bhagavān ratnagarbhacandrāvabhāsaṃ bodhisattvam etad avocad
vacaḥ: "vyākaraṇena cittam āradhayiṣye."

evam ukte ratnagarbhacandrāvabhāso bodhisattvo bhagavantam etad avocad
vacaḥ: "yaḥ kaścid bhagavan śrāddhaḥ kulaputro vā kuladuhitā vāṣṭamaṇḍalakaṃ

- 15 kartukāmo bhavati tena kathaṃ karaṇīyam."

八曼荼羅經

(一切の仏菩薩に) 帰依し奉る

次のように聞いている。ある時世尊は補陀洛 [山] におられましたが、[その] 聖なる
観自在 [菩薩] の宮殿において百千万億の多数の菩薩に囲まれ鑽仰されておりました。

さて、ちょうどその集まった会衆の中に宝蔵月光という名の菩薩摩訶薩が座していまし
た。彼はその座から立ち上がり、偏袒右肩し、右膝を地に着け、世尊のおられる方に向か
って合掌礼拝し、そして世尊に次の言葉を述べました：「世尊よ、私は応供正等如来 [た
る世尊] に些細なことですが教えを請います。世尊よ、お伺い致しますので答えをいた
だければ幸いです。

そのように言われて世尊は宝蔵月光菩薩に次の言葉をお説きになりました：「[私の]
答えによって [汝が] 心喜んでくれることを願います。

そのように言われて宝蔵月光菩薩は世尊に次の言葉を述べました：「世尊よ、或る信仰
ある善男子あるいは善女人が八曼荼羅観をなそうとしますが、彼らはどのようになす
べきでしょうか」。

<テキスト註> (左側の数字は、校訂テキスト(左ページ)の行の数字を示す)

0. Msにはタイトルが漢字で「八曼陀羅經」とのみある。左ページのタイトルはTib: ārya-aṣṭmaṅḍalaka-nāma-mahāyānasūtraによる。Tib: 'phags pa dkyil 'khor brgyad pa zes bya ba ... Ch¹: 八大菩薩仏説曼陀羅經; Ch²: 仏説大乘八大曼拏羅經。
1. Tib sañs rgyas dañ byañ chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal loにより補足。Ms.はnamaḥのみ。
2. Ms (2): bhagavāṃ.
- 3-4. Cf. MV6273: parivrtaḥ. Ms (4): keṭī. Cf. MV6274: puraskṛtaḥ.
5. Ms (6): nāmaḥ.
6. Ms (7)-(8): tatraiva parśadi satvipatito bhūt satiṣaṅṅaḥ. Tib: byañ chub sems dpa'i 'khor de nīd du 'dus par gyur nas 'dug pa de. Ch¹: 衆中; Ch²: 会中. Cf. MV6279: tasmin parśatsaṃnipāte saṃniṣaṅṅaḥ.
- 6-7. Cf. MV6645: utthāya. Cf. MV6276: ekāṃsam uttarāsaṅgaṃ kṛtvā.
7. Ms (9)-(10): dakṣiṇajānumaṅḍalaṃ pṛthivyā pratiṣṭhā. Tib: pus mo g-yas pa'i lha ṅa sa la btsugs nas. Ch¹: - ; Ch²: 右膝著地. Cf. MV6277: dakṣiṇaṃ jānumaṅḍalaṃ pṛthivyāṃ pratiṣṭhāpya.
- 7-8. Cf. MV6278: yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇāmya. Ms (10): tenājali.
8. Ms (11): etad avoca voca. Tib 'di skad ces gsol to. Ch¹: 白言; Ch²: 而白仏言.
8. Ms (11)-(13): pṛcchayamaḥaṃ bhagavāṃ ... kiṃcid eva pradeśam (sic). Tib: bdag phyogs 'ga' zīg źu'o. Ch¹: 我有少疑; Ch²: 今有所問願. Cf. MV6311: kaṃ cid eva pradeśam.
10. Ms (13)-(14): satsa bhagavān avakāśaṃ kuryāt pṛṣṭapraśnavyākaraṇāya. Cf. MV6310: sacet pṛṣṭaḥ praśnavyākaraṇāya avakāśaṃ kuryāt. Msのsatsaはsecetか?
- 11-12. Ms (15): bhagavāṃ. Ms (16): etad avoca voca.
12. Ms (17): arādhayiṣye. Cf. MV6318: cittam arādhayiṣye.
- 13-14. Ms (18)-(19): evam ukte ratne ratnaganbha- ... bodhisatve ... etad avoca voca.
- 14-15. Ms (19)-(22): yaḥ kaścid kāḥgavaṃ śrāddhāḥ kulaputro vā kuladuhitā vā aṣṭamaṅḍala putrabhadraḥ²² kartukāmo bhavati tena katham karaṇiyam. Tib: bcom ldan 'das rigs kyi bu 'am rigs kyi bu mo gañ la la zīg dkyil 'khor brgyad pa bgyid par 'tshal na des ji ltar bgyi. Ch¹: 若善男子善女人、作八曼陀羅者云何建立、(復依何法起無量福、令修行者速証菩提); Ch²: 世尊若有善男子善女人、欲作八曼拏羅、云何受持恭敬供養。

²² 下線部の文字の上にキャンセルの点(インド式のキャンセル記号)がある。後の同じ文字(Ms 24行目)を、誤って書写してしまい、後にキャンセルしたようである。

弘法大師筆写『八曼荼羅經』梵文テキストについて

bhagavān āha: "sādhu sādhu kulaputra, bhadrakās te pratibhānotpannā aty-
artham kulaputra bahujanasukhāya tryadhvasamutpannānām sattvānām atulya-
jñānasiddhaye. tena hi śrṇu kulaputrāṣṭānām bodhisattvānām hṛdayāni, yena
hṛdayena sakṛd uccāritamātreṇa pañcānantaryāni kṣayaṃ yāti sarvathā siddhiṃ
20 ca prāpnoti.

0. om ā vīra svāhā. madhye bhagavān anena hṛdayena pūjyaḥ.

1. hrīḥ haḥ padmapriye svāhā. avalokiteśvarasya hṛdayaḥ.

2. me hāḥ raṇa svāhā. maitreyasya hṛdayaḥ.

3. āḥ garbhāya svāhā. ākāśagarbhasya hṛdayaḥ.

25 4. kṣaḥ hāḥ raje svāhā. kṣitigarbhasya hṛdayaḥ.

5. svāhrī jaya svāhā. samantabhadrasya hṛdayaḥ.

6. kuvāra svāhā. vajrapāṇibodhisattvasya hṛdayaḥ.

7. śrī aragha svāhā. mañjuśrībodhisattvasya hṛdayaḥ.

8. nisarata svāhā. sarvanivaraṇaviṣkambhīṇabodhisattvasya hṛdayaḥ.

世尊は説かれました：「善男子よ、よいかな、よいかな。賢き彼らには真に豊かな弁舌が生じているから、善男子よ、多くの人々に幸福をもたらし、三世に生じる衆生達に無比の智を得させるであろう。それ故に善男子、よく聞きなさい、八（大）菩薩の心咒を。この心咒が一度なりとも唱えられるや否や、五無間（業）は滅し、すべてに関して成就を得るであろう。

0. オーム アー ヴィーラ スヴァーハー 中央にて世尊はこの心咒により供養さるべし。
1. フリーヒ カハ パドマブリエー スヴァーハー [これは] 観自在 [菩薩] の心咒である。
2. メー ハーハ ラナ スヴァーハー [これは] 弥勒 [菩薩] の心咒である。
3. アーハ ガルバーヤ スヴァーハー [これは] 虚空蔵 [菩薩] の心咒である。
4. クシャハ ハーハ ラジェー スヴァーハー [これは] 地藏 [菩薩] の心咒である。
5. スヴァーフリー ジャヤ スヴァーハー [これは] 普賢 [菩薩] の心咒である。
6. クヴァラ スヴァーハー [これは] 金剛手菩薩の心咒である。
7. シュリー アラガ スヴァーハー [これは] 文殊菩薩の心咒である。
8. ニサラタ スヴァーハー [これは] 除一切蓋障菩薩の心咒である。

16. Cf. MV 6314: sādhu sādhu.
 16. Ms (24): pratibhānotpennā.
 17-18. Ms (26)-(27): atulyajñānājaye. Tib: mtshuñs pa med pa'i ye śes bsgrub pa'i phyir.
 Ch¹: 為証無比無上智故; Ch²: 皆得成就無等正智.
 18. Cf. MV 6315: tena hi śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca manasikuru.
 18-19. Ms (29): ye hṛdayena sakṛd uccāritamātreṇa. Tib: snīn po gañ brjod pa tsam gyis.²³
 21-29. 真言については、便宜上基本的に写本通りに読む。宮坂1981 p.(140)-(144)に詳しく考察され、きわめて有用であるので参照されたい。
 21. Tib: oṃ mahā hūṃ mahāvīra svāhā.
 21. Ms (32): bhagavāṃ.
 22. Tib: oṃ hrī hūṃ padmapriya svāhā.
 22. Ms (33): padmapṛye.
 23. Tib: oṃ maihārāṇa svāhā.
 23. Ms (35): metreyasya.
 24. Ms (36)-(37): ganbhāya; -ganbhasya.
 24. Tib: oṃ akāśagarbhāya svāhā.
 25. Tib: oṃ kṣīti ha rāja svāhā. これ以降、梵本とTibとで順番が異なっており、後者では9番目が地藏菩薩である。従って、Tibでは地藏菩薩の真言(oṃ kṣīti ha rāja svāhā)は最後であるが、左ページのテキストと対応させるために、この場所に入れた。
 26. Ms. (38)-(39)にetāny aṣṭaboとあるが、前述のようにこれは本来Ms (44)に入るべきものが間違っここに混入したものである(次ページ冒頭を参照)。
 26. Ms (39): svāhā jaya svāhā. このうちの初めのsvāhāは、チベット語・漢訳等のsvāhri/svāhriに相当していると思われるので、訂正した。宮坂博士はこれを除外されている。宮坂p.(142) 参照。
 26. Tib: oṃ svāhri rājaya svāhā.
 26. Ms (40): hṛdaya.
 27. Tib: oṃ kuru bhana raha svāhā.
 27. Ms (41): -bodhisakṛṣya hṛdaya. (sic)
 28. Tib: oṃ śrī aṃ raṃga svāhā.
 28. Ms. (42)-(43): hṛdaya.
 29. Tib: oṃ nīsvāraṃbha svāhā.
 29. Ms (43)-(44): sarvatīvaṣkambhīnabodhisatvasya hṛdaya.

²³ Tibにはsakṛtに相当する語はない。

30 *etāny aṣṭabodhisattvahṛdayāni. tathāgatasametānām maṇḍalasya purato yaḥ
kaś cid kulaputro vā kuladuhitā vā sakṛd uccārayati sa sarvārthasādhakaḥ kṣipraṃ
cānuttarāyāṃ samyaksambodhāv abhisambuddho bhaviṣyati.
bhagavataivam ukte te bodhisattvā mahāsattvā ārādhitā bhagavataś ca
vacanenābhinanditā bhavanti.*

これらが八（大）菩薩の心咒である。如来を伴った〔八大菩薩〕の曼荼羅の前にて、
[これらの心咒を] 或る善男子あるいは善女人が一度でも唱えたならば、その者の願いは
すべて成就し、さらに速やかに無上正等覚を獲得するであろう。

このように世尊に説かれて、かの菩薩摩訶薩たちは喜び、そして世尊のお言葉に喜悅し
た。

30. etāny aṣṭāboは、前述のように、誤ってMs (38)(39) に書写されている。本来はこの位置にあるべき語である。 Tib: byañ chub sems dpa' brgyad kyi sn̄ñ po. Ch¹: 此八大菩薩曼陀羅供養觀行法; Ch²: 如是八大菩薩根本心大明、作如来曼拏羅。
30. Ms (45)-(46): ... tathāgatasametānāma maṅḍalakasya purato ya (Msの文字はこままでしかない). Tib: ... de bzin gsegs pa dan ldan pa 'di ... dkyil 'khor gyi mdun du ... Ch¹: 受持此八曼陀羅經; Ch²: 於此曼拏羅依法受持。
- 30-31. Tib: rigs kyi bu 'am rigs kyi bu mo gañ la la zig gis. このTib文は、校訂テキスト14行目の文 (yaḥ kaścid ... kulaputro vā kuladuhitā vā) のTib訳と同文である。従って、それに倣って還梵を試みた。 Ch¹: 若善男子善女人; Ch²: 若有善男子善女人。
31. sakṛd uccārayati. Tib: lan cig brjod na. Cf. sakṛd uccāritamātreṇa (校訂テキスト19行目)。
31. sa sarvārthasādhakaḥ. Tib: de'i don thams cad 'grub par 'gyur te. Cf. MV 7510 sarvārthasādhakaḥ.
32. kṣīpram. Tib: myur du.
32. Tib: bla na med pa yañ dag par rdsogs pa'i byañ chub tu mñon par rdsogs par 'tshañ rgya bar 'gyur ro. Cf. MV6355: anuttarāyāṃ samyaksambodhāv abhisambuddhaḥ. (Cf. MV6905: abhisambotsyate.)
- 33-34. Tib: bcom ldan 'das kyis de skad ces bka' stsal nas, byañ chub sems dpa' sems dpa' chen po de dag yi rañs te, bcom ldan 'das kyis gsuñs pa la mñon par bstod do.

なおrañs teについては校訂テキスト12行目ārādhayiṣye (Tib: rañs par bya'o) を参照した。